

オーストリア文学 第三十四号（二〇一八年）  
日本オーストリア文学会編

トーマス・シュタングルの『唯一の場所』における  
ポストコロニアル性

——ドイツ現代文学における「新しい世界文学」との関連において——

副島美由紀

# トーマス・シュタンゲルの『唯一の場所』における ポストコロニアル性

——ドイツ現代文学における「新しい世界文学」との関連において——<sup>(1)</sup>

副島美由紀

## 一、ドイツ現代文学における「新しい世界文学」

世界の脱中心化やグローバル化の進行といういわゆる「ポストモダン」的な流れの中で、「世界文学」という概念も暫く前から変遷を余儀なくされている。英語圏の比較文学の領域からは、D・ダムロツシュやF・モレットティによる「世界文学」の斬新な概念定義の提案がなされている<sup>(2)</sup>。またドイツ現代文学研究においても、「新しい世界文学 (Neue Weltliteratur)」という名称が使用されつつある。しかしドイツのそれはむしろH・K・パーバのポストコロニアル理論に依拠しており、E・シュトゥルムムトリゴナキスは『世界文学としてのドイツ文学』<sup>(3)</sup> という論集において、「国家を超えた境界的フロンティア状況に関わるのが現代の世界文学である」<sup>(4)</sup> というパーバの主張を継承しつつ、移民文学とポストコロニアル文学の二つのジャンルを、ドイツ文学における「新しい世界文学」として位置づけて

いる<sup>(5)</sup>。しかし彼女を含め、A・ホーノルトやS・レフラーといった世界文学の理論家達の分類は、ポストコロニアル文学を定義する視座を欠いているために<sup>(6)</sup>、コロニアル文学のパロディ的作品をもポストコロニアル文学の範疇に含んでおり、「新しい世界文学」の称揚も曖昧なものとなつている。

二〇〇四年に各年の最良のデビュー作品に贈られるアスペクテ賞を受賞したトーマス・シュタンゲルの『唯一の場所』<sup>(7)</sup> は、R・ランスマイアーの『氷と闇の恐怖』やR・シュロットの『フィニス・テラエ』<sup>(8)</sup> といった同じオーストリアの「ポストモダン探検文学」と比べるとその難解さ故か知名度も低く、学術的論考の数も少ない。とはいえポストコロニアル文学としての評価はI・トロヤノフの『世界収集家』といったベストセラー作品よりも高く、このジャンルの中では「最も興味深い書くことの実験」<sup>(9)</sup> だという声さえある。本論はその『唯一の場所』を取り上げ、ポストコロニアル文学の指標を紹介しながら作品の文学的特質を捉え、一つの作品がいかにポス

トコロニアル文学及び「新しい世界文学」になり得るかという具体的な例を示すものである。

## 二、『唯一の場所』における語りの軸の構成

一つの文学作品の何を評してポストコロニアルと呼ぶかについては統一判断基準が存在する訳ではない。例えばインターカルチュラル及びポストコロニアル文学の理論家であるH・ユアリングスは、ポストコロニアル文学の指標として以下の四点を挙げている<sup>(9)</sup>。第一にその内容がコロニアルな想像力を脱構築するもの、つまり「黒人」や「ユダヤ人」といった被差別的トポスを内破させる力学を持つ作品である。第二はポストコロニアルな「他者性」を構築するもの、換言すれば被植民者の声を可視化するものである。第三に、ポストコロニアルな記述を行うもので、U・ティムの『モレンガ』<sup>(10)</sup>における、牛に植民地前史を語らせるといった魔術的リアリズムの手法が例として挙げられる。第四に「世界文学的」な広がりを持つものである。ユアリングスの言う「世界文学的」な要素とは、「文学に関するコミュニケーションを世界的な広がりて推進するような契機」や「多文化に関わる読みや演出」のことである<sup>(11)</sup>。例えばフランス、ジャマイカ、ペルーを結んで展開するH・ミユラーの『指令』<sup>(12)</sup>に、そのような可能性があるとされる。このような特徴があくまで文学的手法のうち発揮され、他者の共同体にヘゲモニー的な規範性を主張しつつ関与するという植民地主義の不当性が暴露される、それがポストコロニアル批評の考えるポストコロニアル文学の特徴及び使命である。

以上のことを念頭に置いて『唯一の場所』の特徴を検討する際、まず言及すべきは語りの筋の構成である。作品の中心軸を成しているのは、十九世紀初頭に行われたサハラ地域の町トンブクトウの探訪物語である。「黄金の町」としてのトンブクトウの噂は十七世紀までにはヨーロッパに及んでおり、「黄金を敷き詰めた街路、黄金の装飾を持つ家々」<sup>(13)</sup>といった誇張された表象とその到達し難さが、「幻の町」としてヨーロッパの想像力を刺激していた。そして十九世紀初頭、誕生間もない英・仏の地理学協会は自国の名誉のために探検家を派遣し、噂の真相を確かめようとする。そして実際にトンブクトウに達し得たのは、イギリスのアレクサンダー・ゴードン・ラング (Alexander Gordon Laing) とフランスのルネ・カイエ (René Caillie) という、性格も旅の手法も全く異なる二人の探検家であった。『唯一の場所』は二人が旅の記録として残した書簡<sup>(14)</sup>と旅行記<sup>(15)</sup>をヒストリオグラフィック・メタフィクションとして演出し、部分に分割して交互に再話したものである。従って読者は二つの全く異なる旅物語をそれぞれに照らし合わせて相対化しつつ、十九世紀のアフリカ探検を追体験することになる。

しかしこの作品の最大の特徴は、上記の探検記の背景においてさらに二種の歴史記述が進行していく点にある。まず登場するのはアフリカ人の視点によるアフリカ史の物語である。サハラ地域では遅くとも八世紀頃から、黄金と岩塩の交易によってガーナ帝国、マリ帝国、ソンガイ帝国といったイスラム諸国が興っており、これらの歴史は主に口承伝達者であるグリオの語によって代々傳承されてきた。『唯一の場所』の語り手は、ガーナ人の歴史家によって採録・編纂されたグリオの叙事詩集と<sup>(16)</sup>、同一著者による西アフリカ史の歴

史書<sup>(7)</sup>を基に、サハラ諸国の概史をグリオさながらに年代順に語り綴るのである。

そしてこの概史と交差するようにして語られるのが、ヨーロッパ人の視点によるアフリカ・デイスコースの歴史である。ヨーロッパは古代ギリシャ時代からアフリカへの関心を記述し、自らの利害に基づくアフリカ像を築いてきたが、作品の語り手は古代ギリシャの歴史家達を始め、ウエルギリウス、M・レリス等の文人や、C・v・リンネ、L・フロベニウス、O・レンツといった学者達の計二十名にも及ぶヨーロッパ人に言及し、彼らのナラティヴを鎖のように繋いで、約三千年にも及ぶ物語としてのアフリカ・デイスコースの歴史を顕在化させる。このアフリカ・デイスコースをE・サイードの提案に従って「アフリカニズム」<sup>(8)</sup>と呼ぶとすれば、この語りの軸はアフリカニズム概史と呼べるであろう。

ラングとカイエの旅行記に加えて上記の二種の歴史／物語の、合計四種の物語がそれぞれ細部に分節化され、全体としては通時的に、そしてそれぞれの物語に即せば並列的に、また時には交錯するようにも語り継がれていく。それは二人の探検記を横糸に、二つの歴史／物語を縦糸にして、シユタンデル自身が「分厚い織物」<sup>(9)</sup>と呼ぶ歴史絵巻を織るかのような作業である。この織物においては個々の物語が他を照射し、自らも相対化されながら、「小さな歴史」と「大きな歴史」が互いを浮き彫りにしつつ進行して行く。結果としてそのようなダイナミズムがアフリカニズムの脱構築や「他者性」の構築といった効果をもたらすのであるが、以下にその詳細を論じる。

### 三、グリオの伝承とアフリカニズム

語り手はまずグリオの口上によってサハラ諸国の歴史を語り始める。「雲の永遠の眠りを妨げてはならない」物語は「ひと度余所に漏らされたら失われてしまうかも知れない」<sup>(10)</sup>、といった警句によつて、あたかも密かな奥義であるかのように語られる叙事詩の内容は、ガーナ帝国、マリ帝国、ソンガイ帝国等を治めた強力な王達の物語である。例えばアレクサンダー大王の黒人の子孫達が興したと言われ<sup>(11)</sup>、豊かな金鉱を有していたガーナ帝国。中でも「百八十八の要塞と三重の城壁に護られた七階建ての城に住んだ」<sup>(12)</sup>と言われるスマオロ・カンテ王の王政は、西アフリカ史において知られている。そのカンテ王を打倒してマリ帝国を築いたスンジャータ・ケイタは、グリオの伝承中最大の英雄であり、以降マリの何世代もの王達は皆、ケイタの系譜を継ぐ。マリ帝国は十四世紀に黒人として初めてメッカ巡礼を行ったマンサ・ムーサ王の下で、栄華の頂点を迎える。「アレクサンダー大王をも凌ぐ」<sup>(13)</sup>ほどの富を有し、「世界征服者」<sup>(14)</sup>とも呼ばれた彼は、「六千、あるいは六万とも言われる数の従者を従えて」<sup>(15)</sup>大巡礼を行い、多量の金を散財したせいでエジプトでは金融危機が起きたと伝えられている<sup>(16)</sup>。マンサ王を頂点として後代のソンガイ帝国の諸王朝に至るまで、この地域の諸王達はイスラム教の推進と伝統回帰の間を揺れ動きながら、たとえば、三百人の妻を持った、あるいは、呪術師であった、等々の伝説を残している。また、トンブクトゥは学問の中心地でもあり、様々な分野に関する五十冊以上の書物を著したと伝えられる

アハメド・ババや、歴史書『タリク・スーダン』の著者と言われるエス・サーディ等の学者を輩出した(1700)。しかし「まるでにんじんを掘るかのように金が採取できる」(1708)と言われた金鉱は次第に枯渇し、土地は徐々に乾燥して国々は衰退に向かう。モロッコ王国を始めとする近隣諸国との戦いや王位を巡る骨肉の争いによっても諸国は疲弊し、結局十九世紀末にフランスの支配を甘受するに至る。

これらのアフリカ人の視点によるアフリカ史が、「分厚い織物」全体の基調を成しており、ヨーロッパ人の探検記に時間軸と空間軸の大枠を提供している。基調となる物語が普通の読者にとって想像力を超える内容<sup>(20)</sup>であることにより、作品全体が読者の想像力に覚醒的な刺激を与える美学的な挑戦となり得ている。また、作品の多文化的な読み可能性を、ユアリングスの言う「世界文学的広がり」として評価することもできよう。

他方、ヨーロッパのアフリカニズムを語る際に語り手はそれを「書かれたもの」と呼び、「それがいかに思考や体験、記憶や語りの偶然の断片に過ぎずとも、そこからのみ思考や体験、記憶や語りが可能になる」(17)として、不安定なグリオの口承に対して文字言語が持つ記憶媒体としての優位性をまずは強調してみせる。そしてアフリカニズムの端緒としてボルヘスの『不死の人』に言及するのだが、そこには象徴的な意味が隠されている。なぜならこの短編は、北アフリカのトログロダイト人(「穴居人」として登場するホメロスと主人公の不死の男とを円環的重複の中に置くこと)によって、アフリカの野蛮に対するヨーロッパの知性、特に言葉の永続性を陰画的に暗示しており、この対立的思考こそ、『唯一の場所』の語りによって脱構

築されるものだからである。

アフリカニズムの担い手としてホメロスに次いで登場するヘロドトス、プリニウス、ストラボンといった古代ギリシャの歴史家達は、彼らが世界の果てに住むと考えていた北アフリカ人種に関して、「トログロダイトは人間と動物と機械の混合種族である」(170)等の奇妙な記述を行っているにもかかわらず、これらの歴史書は後代の人間にとつて大きな権威となる。例えば十三世紀のロジャー・ペーコンが「すべての新しい学問は古い書物の趣旨を確認する」(171)として古い学問に敬意を払っていたように、後世のラングヤフロベニウス等はギリシャ時代の歴史書を探検に持参して参照し、その内容を敷衍するのである。

しかし十四世紀に入ると、アフリカニズムの媒体は歴史書から何やら信用のおけない旅行記に代り、「ナイル川はインドの砂漠を流れる」(172)と説いたジョン・マンデヴィルの『東方旅行記』や、イスラム教に対抗するキリスト教の岩と信じられたプレスター・ジョンの国がエチオピアであるとする説が現れる(173)。この頃アフリカに関する知識を得ていたのはアラブ世界のみで、ヨーロッパにとつてのアフリカは伝説と噂の領域である想像上の世界と言つても過言ではなかった。しかも十八世紀になるとトログロダイト人がリンネによって類人猿に分類され(174)、以降、「アメリカ大陸の発見から数百年を経て初めて、アフリカは(暗黒大陸)となる」(175)のである。語り手によるとこの頃のアフリカニズムは、ヨーロッパが「理性を行使することなく、ただ自らの秘匿された不安を露呈させた」(176)結果であった。アフリカは「奴隷の供給源、見通しの利かない商業拠点」が点在する場所、そして教育、同化、服従、あるいは破壊の対

象として「(一)あらゆる歴史を剥奪され、歴史の外側に置かれてしまふ」(19)。

そしてカイエがフランスに帰還して十年後の一八三八年、イギリスで『人種の滅亡について』(21)という著作が発表される。著者のジェイムズ・C・ブリチャードはその中で、「野性的な人種の存続は不可能である」(30)と説いた。こうして進化論により補強されたイデオロギーによる生存権確保の戦いが始まる。アフリカ人は「過去もなく未来も持たない人種」(30)であり、いずれにせよ滅び行く運命にあるという主張の下に、彼らに対して行われた抑圧と支配と殺戮を、語り手は列挙する。ベルギー国王の私領地「コンゴ自由国」における虐政、ナミビアにおけるドイツ軍の民族浄化戦争、ドイツ領東アフリカやフランス領西アフリカにおける原住民殺害等々、それらは語り手がヨーロッパの「自らの暗闇」(248)と呼んだものの末路であつた。

このように無知と憧憬と恐れの間で揺動し続け、前述のような結末を辿つたアフリカニズムは、ヨーロッパがアフリカの上に投影した一貫性のない矛盾した空想上の観念的構築物に過ぎない。そのイデオロギー的誤謬性はアフリカニズムとほぼ無縁の存在であつたサハラ諸国の歴史に照射されることにより明確になり、ナラティヴの冒頭で強調された文字言語の優位性や、ヨーロッパの知性や言葉の永続性に関しても、その虚構性が露呈する。このような効果を生む文学的手法はまさに「コロニアルな想像力の脱構築」とユアリングスが呼ぶものであり、ポストコロニアル的覚醒をもたらす重要な文学的達成の一つと見なすことができる。

#### 四、二人の周辺の探検家

次に作品の主人公として登場する二人の人物に即して考察してみると、彼らの物語も探検文学にありがちな成功譚ではない。イギリス軍少尉のラングは、英国植民地省の委託によりジョージ四世の名の下に旅をする、言わば文明の使者であつた。しかし彼は一八二六年にヨーロッパ人として初めてトンブクトゥに達したものの、キリスト教徒の侵入を嫌うイスラム勢力により殺害され、砂漠に葬られてしまう。元々この探検は彼にとって不本意な失意の旅であつた。本来ニジェール川の流路調査を希望していた彼は、その機会が自分のライバルに与えられたことに失望し、人間関係や資金問題に関しても植民地省に対し不満を抱いていた。実際の彼の書簡もそのような失望と不信感の表明を多く含んでおり、シユタングルはその散文的な内容に叙情的な彩色を施し、ラングの暗鬱な感情を詩的に伝達する独自の文体を作り上げている。周囲の人間を信用できないラングは隊商の中でも孤立し、サハラ地域の風景や住民にも興味を持たぬまま旅をする。また不意の襲撃を受けたり、疫病に見舞われたり、かつて原住民に対する無慈悲な「大虐殺」(20)を行つた同郷人のムンゴ・パークの再来と見做され、住民の激しい敵意に直面することもあつた。そのような旅の行程は彼にとって「永遠とも思える苦悶」(253)であり、砂漠で見る見事な日没の光景も「美しくも恐ろしい破局的終末」(282)であるかのように思われた。しかしようやくトンブクトゥに達した時、大きさ以外は期待通りの町の様子に彼は初めて心の平安を得る。町が黒人に支配されていることも氣に入

り(32)」、町中の光景にも強く惹き付けられた。

「天と地と、そして天と地に抱かれる形象とが、彼の肉を通じて互いに結ばれている。彼は自分の肉とこの町の石とを結びつける。町の中に住む動物と人間、市場や墓地で見る多様な往来は、全てその豊かさのままに彼の脳裏に刻み込まれる。」(32)

このように町の中の色や形に「真の調和」(32)さえ感じるラングであったが、この探検自体には意味を見出せず、自分がこの土地を訪れる最後のキリスト教徒となることに確信を抱く(33)。また彼の訪問は、サハラ地域においてヨーロッパ人の活動に対する危機感が増大し、一種の鎖国令が発令される時期と重なった。結局彼は町から追放されて殺害され、その結果「歴史上最も軽視されているアフリカ探検者」(32)と呼ばれることになる。それに対してシュタングルは、ラングを言わば忘却の淵から救い出し、読者の感情移入が可能なき悩める人物として造形し、ある意味においては植民地主義の被害者としての側面を読み取れるように描いている。それはシュタングル自身によると、「英雄や勝者によって遮られた歴史の視点を解放する」(33)ための語りの作業である。以下のカイエの場合も含めて、その試みは成功していると言えるだろう。

ラングより二年遅れてトンブクトウに達し、さらにフランスへの帰還を果たしたルネ・カイエも、やはり探検家としては周辺の存在であった。軍人でも学者でもない一介の労働者だった彼は、孤児でパン屋の見習いという身分ながら探検に憧れ、十六歳で単身アフリカに渡る。そして誰の資金援助も得られぬまま単独でトンブクトウ

探訪の旅に出る。ラングの数倍の時間をかけてアラビア語や現地の言語を学び、キリスト教徒に対する反感を体感していたカイエは、「アブダラという名のエジプト人」という偽装を貫徹することにより、辛くもサハラ縦断に成功するのである。帰国した彼は三巻本の旅行記を発表するが、その内容は詳細ではあるものの即物的かつ淡泊で、『唯一の場所』の語り手によると「生じた事柄の退屈な羅列である」(31)。そこでシュタングルは誇張と諧諷を加味し、カイエの単調な旅行記を起伏に富んだ物語に変容させる。例えば壊血病に罹ったカイエがある村の老婆に介抱される件であるが、カイエ自身はその場面を「老婆がやって来て私を入念に調べ、あなたに効く薬をあげるからそれですぐに良くなるよ、と慰めてくれた。」(24)と記述している。しかしシュタングルの設定した語り手によると、情景は以下のように変貌する。

「彼女は黄色い充血した眼でカイエの黄色い充血した眼を覗き込み、彼の額に手を当て、彼の両の掌と、泥と血が固まってへばり付いた足と、胸と額とに唾を吐きかけ、彼の唇を馬にするかのように上下にひんむいた。そして囁いた、人の主の庇護に身を委ねます、人の王、人の神の庇護に。(するとほんの短い一瞬、彼は慰められた気がしたのだ、彼の喉の奥にアラビア語の言葉の幾分変形した断片が出現した。この地方の女がアラビア語に通じているなんて信じがたい話だ、でもその言葉はこの場面にぴったりだったのだ。)」(24)

このようなシュタングルの臨場感に富んだ筆致は、カイエと原住

民との関係性を強い現実感を伴って読者に訴えることに成功している。またその調子は、ラングの旅を描写する際の詩情とは対照的に、ユーモラスでしかも乾いている。帰国して勲章や年金を得るもの、その出自故か地理学協会に軽侮され(236)、祖国での暮らしに馴染めず最後までアフリカに戻ることを夢見ながら早過ぎる死を迎えたカイエの、「歴史上最も風変わりな探検者」(25)としての存在の特異さを、その語り口は際立たせる。さらに特筆すべきは、カイエとの関係を通じて再現される原住民の会話により、「他者性」の顕現が可能になる点である。

ポストコロニアル文学における「他者性」の構築については、「感情移入の美学自体がコロニアルな行為である」(26)というU・ティムの言明が、「他者」の代補に纏わる困難さを簡潔に表現している。「他者」の可視化の成否はポストコロニアル文学批評における評価項目の一つとして分析され、例えばトロヤノフの『世界収集家』における直接話法に拠る被植民者の語りに対しては、非在の被代表者を装いつつも「結局はヨーロッパ人の優越性を裏書きする」(27)という批判がなされている。それに対して『唯一の場所』においては、原住民の会話は徹底した間接話法によって再現される。内包された作者の地点と「他者」との間に緩衝空間が置かれることにより、直接的な介入関係のない自立した存在として「他者」の地平が出現し、さらに上述の例が示すような語りの臨場感が、西洋的階層秩序とは無縁の自立した生活空間に尊厳を持って生きる人々として「他者」を描き出すことに成功している。

サハラ地帯は「空白地帯」でも「闇の奥」でもなく、町と町を繋ぐ交通網を隊商が行き交う交易空間であり、そこに住むのは単なる

「黒人」ではなく、それぞれ独自の言語と文化を有するマンディング人、ソンガイ人、フラニ人やバンバラ人である。「モスリムの聖なる役目」(22)として客人を厚遇する彼らは、主人公達を看病したり椰揄の対象にもする援助者として現れる。白人を見慣れない者はカイエの肌を見て「その下に本当の黒い自分を隠しているのか」(28)と問い、その「奇妙な肌の色にもかかわらず」(29)彼に厚情を示す。モスリムと自称してこれらの「仲間達」(30)と交わるカイエは、時折ルネ・カイエではなく「アブダラ以外の何者でもなくなる」(31)こともあり、自己同一性という神話は次第に弱体化する(32)。とは言え、キリスト教徒に関する原住民の会話は常にカイエ自身の自己イメージに振動を与えるため、彼の特別な関心を惹く。キリスト教徒は大きな家に富を蓄えて住んでいるくせに「飢えた者に幾ばくかの施しをするよりも殺される方を選ぶ」(10)のような貪欲さで知られており、「キリスト教徒のように」というのは、強奪を生業とするトゥアレグ族の強欲ぶりを表現する枕詞にさえなっている程だ(33)。結局ラングがトンプクトゥから追放されたのも、キリスト教徒は「長く続く戦争と災禍」(34)をもたらすという見解に首長達が至ったからであった。作品の終末部において「悪夢のような」(35)アフリカニズムの帰結が紹介される時、原住民によるキリスト教徒の評価が一貫した至当性を持つていたことに、読者は思い至ることになる。このような効果をもたらすのが、ユアリングスの言う「記述のポストコロニアル性」である。ラングとは対照的に、砂と泥で出来た小さな町トンプクトゥを見て「ただただ泣きたい」(32)と思うほど失望したカイエの手記は、フランスの専門家達をも失望させ(36)、モスリムを装うという彼の手法をカトリック教会は非難



した(36)。けれどもカイエの物語はシュタングルの再話を経て「他者性」を構築し、前述したようなポストコロニアル文学としての資質を獲得するのである。

## 五、「新しい世界文学」との関連

『唯一の場所』のもう一つの大きな特徴は、語りの行為全体がポストモダンの及びポスト構造主義的の了解の下に行われていることだ<sup>(30)</sup>。語り手の指摘によれば、まず主人公による探検の記録自体が読者を意識して書かれたものであり、真実とは言い難い物語である(39、130)。そして作者であるシュタングル自身が「幽霊のような」<sup>(31)</sup>と形容する、確固たる拠点を持たない自由自在な視点から、語り手自ら「我々の想像に委ねられた」(107)とする物語が語られる。このように語り手は「信頼できない語り手」を明示的に演じ、自身が語る物語をも含めた歴史/物語の虚構性を開示するのである。さらに、作品には記号における絶対的現前性の不在を意味する「空所(Leere)」という語彙が頻繁に登場し、記号としての言葉とトポス、また物語それ自体の中心にこの「空所」が存在することの指摘が行われる。例えば物語は「空虚な形式(ohne feste Form)」(137)、その舞台となる場所は「すべての言葉の動きの空虚な中心」(150)と呼ばれ、それらの「空所」が変容と反復を経ながら継承されていくことが強調されるのである。そのため、作品の中心にあるのは実は探検ではなく、アフリカとトンブクトゥに纏わる表象とその揺動である<sup>(32)</sup>という読みも成立する。実際に作品では、「トンブクトゥ」という名称が時代や言語の違いに拠る差異を孕む十九通りの書記法に

よって記載され、トポスに関わる表象の変遷を象徴している。また、語りの行為と旅の行為についても変奏と反復の無限の可能性が強調され、「世界こそが唯一の場所」(36)という言明からも、「唯一の場所」とは反語的な謂であることが明らかになる。このように、物語に備わるイデア性の非現前性と虚構性を自ら前景化しつつ物語を語るという姿勢こそ、上述のようにこの作品が「最も興味深い書くことの実験」と呼ばれる所以である。

一方、ドイツ文学における「新しい世界文学」の現状を見ると、ポストコロニアル文学の定義に踏み込まない現在の理論による「世界文学」という名称は、移民文学や旅行文学も含め、インターカルチュラル、トランスカルチュラル、ハイブリッド<sup>(33)</sup>といった多種のジャンルにおいても使用され、一種の流行語といった感がある。

このような広範囲な範疇の設定は、グローバル時代の文学を形容するための一つの試みではあるかも知れないが、一つの概念の過度の伸長は個々のジャンルの特性と問題性を不明瞭にしてしまう。そのような伸長はユアリングスも言うように「善意からではあるが説得力に欠け」<sup>(34)</sup>、実際は読者を益するところとはならない。このような新たな「世界文学」を巡る近年の「ブーム」<sup>(35)</sup>においては、ジャンルの定義はさておき、概念誕生当初の期待の核心を改めて問うことも有効であろう。

「新しい世界文学」のカテゴリー化に根拠の一つを与えたバーバの思想に立ち返ってみるならば、彼が現代の「世界文学」を「他者性」を通じて自己認識に関わる現象<sup>(36)</sup>と考えていたことにも留意すべきであろう。つまり文学の「世界化」において彼が重要と考えていたのは、植民地主義の多文化主義や文化相対主義への着地ではなく、

文学作品によって「人間的歴史的に別の時間、異なる空間に生き、存在するとはどういうことなのかについて」<sup>(37)</sup> 読者の感覚に変更がもたらされること、と同時に「文学が使う手品」が暴露され<sup>(38)</sup>、我々の主体性が「記号による意味付けの行為を通じてどのように変形されるのか」<sup>(39)</sup>が示されることであった。こうしてバーバの考えた「世界文学」はかつてのコロナールな主体構築のプロセスを露呈させ、その歴史のプロセスを経て現在に生きる読者が自分自身の主体性を再構築するように促すのである。

このように考えた場合、『唯一の場所』は、アフリカを巡る記号のずれに抑圧の契機が書き込まれる様子を露わにし、かつヨーロッパの植民地主義的欲望を脱構築しつつ<sup>(40)</sup>「他者性」に関わる読者の想像力を更新するという点において、「新しい世界文学」に向けられた本来の期待に沿う作品であると言えよう。ドイツ現代文学研究においてこの新興のカテゴリーが今後も定着するとすれば、シユタンダルの『唯一の場所』こそそのような名称に値する、と筆者は考えている。

## 註

- (1) 本論文は JSPS 科研費 15K02400 の助成を受けたものである。
- (2) デイヴィッド・ダムロッシユ(秋草俊一郎他訳)『世界文学とは何か』(国書刊行会、二〇一一年); フランコ・モレッティ(秋草俊一郎他訳)『遠読―世界文学システムへの挑戦』(みすず書房、二〇一六年)
- (3) Beebe, Thomas Oliver (Hg.): German Literature as World Literature.

- (4) New York 2014.
- (5) ホミ・K・バーバ(本橋哲也他訳)『文化の場所: ポストコロニアリズムの位相』(法政大学出版局、二〇〇五年) 二二頁。
- (6) Sturm-Trigonakis, Elke: Contemporary German Based Hybrid Texts as a New World Literature. In: Beebe (Hg.) (2014), S. 177-195. Vgl. Honold, Alexander: Ankunft in der Weltliteratur. In: Neue Rundschau. Nr. 118, Heft 1, 2007, S. 82-104; Löffler, Sigrid: Die neue Weltliteratur und ihre großen Erzähler. München 2014; Sturm-Trigonakis, Elke: Global playing in der Literatur: ein Versuch über die Neue Weltliteratur. Würzburg 2007.
- (7) Stangl, Thomas: Der einzige Ort. Graz 2004. 本文中の引用箇所は頁数のみを括弧内に記す。
- (8) Schrott, Raoul: Finis Terrae: ein Nachlass. Innsbruck 1995.
- (9) Scherpe, Klaus R.: Teclue und Poiesis. In: Acta Germanica. Vol. 42, 2014, S. 23.
- (10) Uerlings, Herbert: Postkolonialismus und Kanon. In: Ders. und Iuliana Karin Parut (Hg.): Postkolonialismus und Kanon. Bielefeld 2012, S. 53ff.
- (11) Timm, Uwe: Morenga. Königstein im Taunus 1978.
- (12) Uerlings (2012), S. 61.
- (13) Müller, Heiner: Der Auftrag. Frankfurt a. M. 1980.
- (14) Bovill, E. W. (ed.): The journal of Friedrich Homemann's travels from Cairo to Murzuk in the years 1797-98; The letters of Major Alexander Gordon Laing, 1824-26. Cambridge 1964.
- (15) Caillé, René: Journal d'un voyage à Tembouctou et à Jenné dans

- l'Afrique Centrale. Paris 1830; (English edition) *Travels Through Central Africa to Timbuctoo*. London 1830.
- (16) Niame, Djibril Tamisir: *Soundjata ou l'épopée mandingue*. Paris 1960; Ders.: *Soundjata. Ein Mandingo-Epos*. Leipzig 1975.
- (17) Niame: *Recherches sur l'Empire du Mali au Moyen*. Paris 1959; Ders. und Jean Siret-Canale: *Afrikanisches Geschichtsbuch. Geschichte Westafrikas*. Darmstadt 1963.
- (18) 日・W・サトー (大橋洋一訳) 『文化と帝国主義』 (みすず書房、一九九八年) 一―一二頁。
- (19) Stangl, Thomas: »Black speck amid a waste of dreary sand...«. In: Hamann, Christof und Alexander Homold (Hg.): *Ins Fremde schreiben*. Göttingen 2009, S. 269.
- (20) Langer, Patricia: Eine philosophische Exkursion: Poststrukturalistische (Denk-) Muster in Thomas Stangls „Der einzige Ort“. *Marburg 2008*, S. 6.
- (21) Pritchard, James Cowles: *On the Extinction of some Varieties of the Human Race* 1838.
- (22) Bovill (ed.) (1964), S. 125.
- (23) Stangl (2009), S. 272.
- (24) Caillie (English edition) (1830), S. 337.
- (25) Welch, Galbraith: *The unveiling of Timbuctoo*. New York 1993, S. 12.
- (26) Hamann, Christof und Uwe Timm: „Einfühlungsästhetik wäre ein kolonialer Akt“. Ein Gespräch. In: *Sprache im technischen Zeitalter*. Vol. 168, 2003, S. 452ff.
- (27) Bay, Hansjörg: *Literarische Landnahme? Um-Schreibung, Partizipation und Wiederholung in aktuellen Relektüren historischer „Entdeckungstouren“*. In: Ders. und Wolfgang Struck (Hg.): *Literarische Entdeckungstouren*. Köln 2012, S. 124.
- (28) Dunker, Axel: *Postkoloniale Ästhetik? Einige Überlegungen im Anschluss an Thomas Stangls Roman Der einzige Ort*. In: Uerlings / Patrut (Hg.) (2012) (wie Anm. 10), S. 317.
- (29) Stangl (2009), S. 268.
- (30) 詳細は以下の拙論を参照: 副島美由紀「トーマス・シュタングルの『唯一の場所』と『記号の山びとの旅』——シュタングルとドナルド・アルト——脱構築理論のうらぶ——」In: 「小樽商科大学人文研究」一三三輯、二〇一六年、一二九―一四七頁。
- (31) Stangl (2009), S. 269.
- (32) Bay (2012), S. 125.
- (33) Löffler (2014), S. 8ff; Sturm-Trigonakis (2007) (wie Anm. 6), S. 47ff.
- (34) Uerlings, Herbert: *Interkulturelle Germanistik / Postkoloniale Studien in der Neuen deutschen Literaturwissenschaft*. In: *Zeitschrift für interkulturelle Germanistik*. Vol. 2, 2011, S. 36.
- (35) Sturm-Trigonakis (2007), S. 26.
- (36) バーン前掲書、一一頁。
- (37) バーン前掲書、四二―六頁。
- (38) バーン前掲書、一一三頁。
- (39) バーン前掲書、一一三頁。
- (40) Götsche, Dirk, Axel Dunker und Gabriele Dürbeck (Hg.): *Handbuch Postkolonialismus und Literatur*. Stuttgart 2017, S. 333.

**Thomas Stangl *Der einzige Ort* und seine Postkolonialität  
— Im Hinblick auf die „neue Weltliteratur“ —**

Miyuki SOEJIMA

Im Zeitalter der Globalisierung unterliegt auch der Begriff von „Weltliteratur“ dem Wandel. Im Bereich der Komparatistik sind originelle Vorschläge zu einer neuen Definition der „Weltliteratur“ gemacht worden, und auch auf dem Gebiet der deutschen Gegenwartsliteratur ist in letzten Jahren von der „neuen Weltliteratur“ die Rede – einem kulturell entgrenzten Schreiben, zu dem beispielsweise Migrationsliteratur und postkoloniale Literatur gehören sollen.

Die Tendenz zur „neuen Weltliteratur“ zeigt sich bei keinem anderen Werk der deutschsprachigen postkolonialen Literatur so deutlich wie bei *Der einzige Ort*, dem 2004 erschienenen Debütroman von Thomas Stangl. Dieser postmoderne Entdeckungsroman ist die historiographische Rekonstruktion der Entdeckungsreisen des Engländers Alexander Gordon Laing und des Franzosen René Caillié auf dem Weg zu der legendären Stadt Timbuktu aus den literarischen Quellen der 1820er Jahren. Und die Eigenart dieses Romans liegt darin, dass im Hintergrund beider Abenteuergeschichten noch zwei historische Geschichten parallel verlaufen: Die eine ist die Geschichte der großen westafrikanischen Reiche aus der afrikanischen Perspektive, und die andere die Geschichte des Afrikanismus, d.h. des europäischen Afrikadiskurses. Diese vier Erzählstränge werden in kleine Segmente geteilt, wie im Vierertakt ineinander verflochten oder nebeneinander und nacheinander dargestellt, sodass quasi ein dichtes Gewebe der Beschreibungen entsteht.

Durch dieses Gewebe werden Eigenschaften der postkolonialen Literatur erzeugt. Erstens werden die Abenteuergeschichten entromantisiert. Gordon Laing, der als ein Bote der Zivilisation mit der Macht des Britischen Empires hinter sich reist, fällt deshalb auf und wird auf dem Rückweg von den antipathischen Kräften ermordet. René Caillié, der sich ohne jegliche finanzielle Unterstützung ganz allein in die Wüste wagt, kann dank seiner Verkleidung als Muslim sein Unterfangen glimpflich vollbringen, ist aber ständig auf das Wohlwollen der Einheimischen angewiesen und von der traurig grauen, lehmigen Stadt Timbuktu äußerst enttäuscht. Zweitens wird die Einstellung des Afrikanismus dekonstruiert, in dem sie von der afrikanischen Geschichte reflektiert wird und ihre Willkürlichkeit und Irrtümer bloßgestellt werden. Drittens: Postkoloniale Alterität wird konstruiert, indem die schwarzen Einhei-

mischen als Helfer der Hauptfiguren vorkommen und als selbstständig und würdevoll lebende Menschen geschildert werden. Viertens: Das Selbstbild der Protagonisten (und auch der Leser) wird infrage gestellt, indem die einheimischen Betrachtungen über die Christen – sie seien habgierig und würden andauernde Krieg und Unheil bringen – erwähnt werden und sich am Ende des Romans verwirklichen. Letztens: Der Zusammenhang zwischen der afrikanischen Geschichte, die auf epischen Texten des Gesangs eines Griots basiert und das Imaginationsvermögen der Leser herausfordert, und den anderen drei europäischen Geschichten bietet weltliterarische Perspektiven. All diese strukturell durchdachten literarischen Verfahrensweisen erfüllen das Kriterium einer postkolonialen Literatur mit ethischen und ästhetischen Dimensionen.

Darüber hinaus ist auch der postmoderne und poststrukturalistische Charakter dieses Romans zu erwähnen. Der heterodiegetische Erzähler des Werkes agiert als unzuverlässiger Erzähler und deutet eine gewisse Fiktionalität an, die allen Geschichten innewohnt. Dazu werden die Wiederholbarkeit der einzelnen Geschichtstücke und die Abwesenheit der Gegenwart der Ideen hervorgehoben. Auch mit diesem Erzählmodus, ohne festen Boden unter den Füßen zu erzählen, lässt sich *Der einzige Ort* als ein postkolonialer, posthistorischer und postheroischer Roman lesen, der das literarische Potenzial besitzt, kulturelle Antagonismen zu entgrenzen, was das ideale Charakteristikum der „neuen Weltliteratur“ der deutschsprachigen Gegenwartsliteratur ausmacht.